

風と未裔シリーズ・4thシーズンの5

～空の贈り物～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

風出流山かぜいするやまの神殿。

「ずーっとニヤけていますよ。そんなに嬉しいですか？」

暖炉の前で寝転がったカワセミに、大長が馬頭琴をいじりながら話しかけた。

「まあね。シンリィからの、初めての贈り物だし…」

カワセミは腹這いで顎を床に付けて、鼻先の黄色い蜜柑を転がしながら、目を三日月のように細めた。

「まったく！ 大の大人が二人で昼間っから『コロコロ』。かさ張るったらありゃしない！」

蒼の狼がモップを持ってドカドカやって来た。

「たまには山の生き物の用事でも聞いてあげに行ってください。まったく、二人とも『凄い能力の持ち腐れ』なんだからっ」

モップに掃き出される前に、かさ張る二人は居間を退散して、玄関の階段に移動した。珍しく風の無い朝で、雪原は樹氷のキラキラに照らされている。

「シンリィを慰めに行くって出たんじゃなかったですか？」

「そのつもりだったんだけど…」

ナーガがエノシラに振られて落ち込んでしまった事に、シンリィは偉く動揺していた。エノシラを『お母さん』に選んだ自

分のせいだと、ひとり胸を潰していたのだ。

そんな気持ちで心にボツカリ穴を空けてしまったのが、胸のピンクの石を通して、カワセミに伝わった。今のナーガは宛てにならない。ここは自分の出る幕だろうと、ミルクのような霧のたつ早朝、里の側まで行って呼び掛けた。でも『おまけ』が着いて来た。

「シンリィの奴、ボクに甘えるのはお預けにして、寂しがり屋の女のコの面倒を見ていたんだ。まったく、誰に似たんか…」

「だから、貴方にですって」

「……………」

「自分の事は我慢して、その娘とナーガの心を癒そうと、怖がりにくせに遠出したり、苦手な木登りしたり、頑張っていたんでしょう？ 貴方そっくりじゃありませんか」

「……………」

「それで、貴方も手伝ってあげたんでしょ？」

「まあ…西風あの娘、ちよいと自信が持てれば、先が開ける所に居たからね。ナーガには可哀想だったけれど…」

カワセミは黒虎の毛の入った古い小袋を取り出して振った。

「それで、シンリィが、健気にナーガを庇ったりして、貴方は嬉しかったり寂しかったり？」

最近、大長はスケスケと言いたい事を言ってくれる。蒼の狼の影響だろうか？

「やっと一人になった時会いに行ったり、今日は一緒に居られなくてごめんね、代わりにこれあげる…だってさ」

水色の妖精は唇を尖らせて、指の上で蜜柑をクルクル回した。

「まったく、いつの間にかボクにまで気を使えるようになって。すっかりし過ぎて嫌になる…」

カワセミはまた目を三日月にして、口の両端をキュッと上げた。

秋晴れの空に鳶どんびがゆったり旋回している。

里の奥の放牧地。

ルウがでっかい剣を両手で掲げて、大声で叫んでいる。

「ほら早く！ あの時の緑の光を射ってくれ！」

離れた所に向かい合って、羽根の子供が、困った感じでホヤンと突っ立っている。

「もういっぺん、あれ、やってみたいんだ。そしたら、これからはどんな奴でも倒せるぞ！ だから早くっ！」

ルウは焦れて地団駄踏んだ。

「はい、そこまで——」

地団駄の肩を後ろから押さえられて、剣の束を取り上げられ

た。

「僕の剣を返して下さい。まったく油断も隙もありゃしない」
剣の外された腰ベルトを携えたシドが、『めっ』て顔で立っていた。

「もう良いだろ、帯剣しても？ 私も長剣が欲しい」

「十二歳の誕生日まで駄目です。西風の決まりですから」

「私、本当に黒虎を倒したんだ」

「嘘だなんて思っています。ナーガ様も見ていたんだし」

「じゃあ良いだろ、二年くらい早くたって。前倒しで、今度の誕生日に。な！ な！」

「一人で倒したんじゃないでしょう」

ソラが土手の向こうから姿を現した。

「シンリィの破邪の呪文を貰ったんでしょう？」

「うん…、そうだけれど…」

「二人とも、昨日の罰がまだですよ。ノスリ長様からキツクイお灸があるから、覚悟して執務室へ行きなさい」

シンリィはこれ幸いと、土手をよじ登って執務室方面へ駆け行っった。

「出来れば、僕も見てみたかったな。カワセミ長譲りの術」
シンリィを見送りながら、ソラはポツリと言った。

「そんなに凄い術者だったのか？ シンリイの父者は
ルウも土手を登りながら振り向いた。

「ええ…」

二人の青年はしんみりと遠い目をした。二人にだけ共有出来る思いがあるんだろう。

(いいな…)

ルウシエルは足元のススキの穂をバサリと蹴り上げてから、
執務室へ走り出した。

災厄の時代の前の、話にだけ聞く凄いヒト達。自分も、ちょっと前の時代に生まれたかった…。

「まあだそんな所でたぐってたんですかあ?！」

風出流山の神殿。

『凄いヒト達は神殿の階段で、蒼の狼のモップに追い立てられていた。

「山の生き物達が神殿の采配を仰いでいるんです。とっとと行って、それなりの御神託をかまして来て下さい」

「そんな面倒臭い事、やってたのお?」

「信仰は思わぬ所に湧くものです。無下に出来るモノじゃないでしょ?」

大長は鬪牙の馬を引っ張り、カワセミと二人乗りで、モップ

に突き上げられながら神殿を飛び立った。

「さっきの話の続きですが」

大長は馬を降下させながら聞いた。

「西風のルウシエルに足りなかったのは、自信だけだど?」

「うん…」

カワセミは大長の後ろで、風に目をしばたいた。

「モエギも大したモンだったけれど、あの娘はそれに輪を掛けた大物になれるね」

「そうですね、貴方の呪文を一発で受け止められたんですから。幼児の時しか知りませんが、あの頃から感覚の鋭い子供でしたね」

「砂の民の強い血のフレンドが生きている」

「フレンドですか?」

「ボク達だってそうでしょ」

「まあね…」

神殿を降りた風の祖先が、大地の妖精と交わって力を得たのが、蒼の一族だ。

「でも、ルウシエルには、自信だけじゃ足りないですよ。もっと必要なモノがあります」

「…?」

「おやおや」

馬繋ぎ場へ降り立ったナーガは、手綱を取りに来たのが関係ではなく、藁まみれのルウシエルだったのに、目を丸くした。

「罰だ、ノスリ長からの。今日一日、既の掃除と手伝い」

奥からシンリィが、馬糞が満載された掃除カゴを抱えて、ヨタヨタと左右に揺れながら歩いて来る。

「あ、あああ、大丈夫か？ あんな重い物を…」

「ああ、上手いモンだぞ」

ルウはすまして馬を繋いで手入れを始めているが、シンリィはどう見たって危ない。案の定、足元を絡ませてヨロけた。

「ああ！ 危ない、シンリィー！」

ナーガが駆け寄ると、シンリィが羽根を広げてバランスを立て直すのと同時だった。

お約束…というか、カゴを受け止めようとした手が空振りして、ナーガは馬糞の山に突っ込んで凄いな事になった。

「……おっさん…。シンリィを助けようと思う気持ちは分かるけれど…。好きこのんでドツボにハマりに行っているようにしか見えないぞ…」

執務室のノスリは必死で笑いを堪（こら）えながら、物凄いあ

りさまのナーガの横のシンリィに、お役ご免を言い渡した。

色んな意味でダメーシを受けているナーガはシンリィに支えられ、連れ立って水あみ場へ向かう。

「良いコンビだな」

一緒にお役ご免を買ったルウは、二人の後ろ姿を見ながら、ほんのりと言った。

「お前さんもそう思うか？」

ノスリも穏やかな声で言った。

生真面目で融通の効かないナーガが、言葉の通じないちっちゃい子供を連れて来た時はどうなる事かと思ったが、なんやかやと上手くやっている。そして、ふと気が付くと、ナーガは大きく変わっていた。

奥で書き物をしていたホルズも、顔を上げた。

「そう！ シンリィによってもたらされた功績は大きい！」

「なに、それ？」

「あの、女性に無関心だったナーガが『失恋』するなんて！ 物凄い進歩だとは思わんか？」

「はあ…」

親子が小舅（こじゅう）と話で盛り上がり始めたので、ルウは執務室を後にした。

ナーガのパオの前に、洗い髪のシンリィとエノシラがいた。ルウを見たシンリィが、テトテトと走り寄って来て、ペトットと張り付いた。

「何だ?! いきなり」

「今晚、泊まりに来て欲しいんですけど。ほら、約束したでしょ?」
「里へ来た日」

「ああ…」

思い出した。でも、もうシンリィを自分にしなくてもいいんだけれど…。

「お互い良く知る為に、一晚共にするのでしょ?」

罪のないエノシラの言葉に、パオの中で男三人、お茶を噴き出した。

「いいですか、くれぐれも、ご迷惑を掛けないように」

シドとソラに交互に何度も言われて、ルウは寝間着を抱えて、里の奥のエノシラのパオに向かった。

「あれ?」

「どつしたの?」

玄関で立ち尽くすルウを、エノシラは覗き込んだ。

「ああ、うん…、似ている」

「へ? どっかの家?」

「いや、西風の里の、中心の宿屋に」

「宿屋? ふふ、そんなに広くないわ」

「見た目じゃない、あっちは石造りだし。全然違つのに、何で似ているなんて思ったんだろう?」

いぶかるルウの手を引いて、シンリィがニコニコと中へ誘い込んだ。

暖かな夕食を済ませ、エノシラにせがまれるままに砂漠の話なんかして、ベッドに入った。

エノシラは自分のベッドをルウに明け渡して、自分はシンリィと寝ると提案したが、シンリィがまたルウにペタリしがみ付いた。

「私は構わないぞ」

ルウはシンリィと枕を並べてベッドに潜り、それぞれ横になると、エノシラはすぐ寢息を立て出した。風間オウネ婆さんにしこかれて、ハトハトなんだ。

シンリィはルウの手をキョット握って、そしてやっぱりスウスウ言い出した。本当に、猫みたいなふわふわな頭だなあ……と思いつつ、ルウもまた眠りに付いた。既仕事って、あんなにハードだったんだな…。

高い所から飛び降りるような、吸い込まれる感覚。その後、上下の分からない、あやふやな空間を歩いていた。

誰かが手を引いている。……シンリィ…?

ああ、シンリィと手を繋いで寝ているから…、これは夢なんだ…。ルウは漠然と自覚した。

不意に、シンリィがルウの手を離して駆け出した。夢の中のシンリィは、左右に揺れず真っ直ぐ走った。その先に誰か立っている。

「…誰…?」

視界の焦点が合って、人影が鮮明になる。

水色の長い髪が腰を覆う、酷く痩せこけた男性。多分蒼の妖精なんだけれど、この里のヒト達とは、雰囲気全然違う。このあやふやな空間で、凜とした存在感がある。駆け寄ったシンリィの頭に手をやると、子供は心得たように離れて、空間に溶けて消えた。

「おご、シンリィ…?」

夢の中の声は、口からじゃなく、頭から発せられた。

「あの子の役目はキミを案内する事だけだったから…」

水色のヒトの声も、頭に聞こえた。

「ボクは弟子は取らない」

ルウを見据えるその目は、シンリィよりも薄い、玻璃(はり)

のような水色だった。

「でも、キミの面倒なら、ちょっと位なら見てもいい。西風のルウシエル、ボクに師事する気はあるか?」

いきなりな話だ。このヒトが誰で何者なのかも知らない。

だけど、ルウの心の乾いた部分を、そのヒトの深い声が潤すのが分かった。

「……お願い、します……」

「師が必要なんですよ、あの娘には。生涯信頼出来て、抛り所になる」

大長は、蒼の狼に馬頭琴を聞かせながら、語った。

「力だけあっても駄目です。殻を取り除いて、曲がらぬよう導いてやる存在が居る居ないは、大きな違いです」

「そう…」

蒼の狼は、蒼い月を眺めながら、拙つたない琴の音を丁寧に拾って聞いている。兄の両手は火傷で引きつれているので、そんなに上手く弾けない事は承知している。

「そういうえば、ワタシの師って、誰だったのかしら……」

「行って来ます」

羽根の子供の手を引いて、オレンジの瞳の娘が修練所へ駆け

て行く。エノシラはニコニコと二人を見送ってから、オウネ婆さんの仕事場へ向かう。

ルウシエルはあの日以来、ずっとエノシラのパオに寝起きしている。シドとソラは最初ヤキモキしたが、シンリイがルウを気に入ってベッタリくっ付いているし、エノシラもそれで助かっているみたいなので、とうとうルウのベッドをエノシラのパオに移動させた。

「黄色い実の内緒で蜂蜜に漬けて、シドとソラにあげてびっくりさせるんだ」

ルウは目に見えて変化して来た。所作に落ち着きが出て、口数が減った。無口になった訳ではなく、物ひとつ喋るにも、考えて、気持ちを込めるようになった。

「エノシラって大した教育者だったんだ。サオセンセとピッタリのコンビかもしれないね」

こんな言葉が出るくらいナーガの傷も癒えた頃には…、ルウは大人びたというか、涼やかな表情に、時々ドキリとさせられる程にもなっていた。

夏草が黄金に変わり、そして灰色に覆せて、草原を初冬の風が渡った。贈り物のように、空から白い物が落ちて来る。

「これが『雪』って奴か…」

朝もやと風花かざはなの混じる白色の中、今日十歳になったルウは、シンリイと二人、ハイマツの丘に立っていた。草原を一面に雪の白が覆って行く様を、しっかりと目に焼き付けている。

「本格的な冬が来る前に戻らなきゃ」

繋いだ手に力を入れて、シンリイが見上げる。

「大丈夫だ。離れていても心が側にいれば…だろ？」

羽根の子供は、真ん丸な目を三日月にした。

「今度はお前が西風の里に来ればいい。砂漠に沈む四角い夕陽を見せてやる」

天井からナーガの草の馬が、雪をまとって降りて来た。

「ルウ、シンリイ、何だってこんな所に？」

「行き先を書いて来ただろ？ 家出じゃない。それに迎えに来なくても、二人で帰れるのに」

「だって心配するだろ？ ルウは寒さに慣れていないし、…」

…それ、何？」

「そうか、ありがとう」

と言う娘の胸には、細長い布包みが抱えられていた。

「誕生日の贈り物」

「…？…誰から？」

「蒼の狼…、白い羽根の」

「はあ？ 母上え?!」

「今回も息子に会って行かなかったな。おっさん、何か怒らせてるのか？ だったら早めに謝っといた方がいいぞ」

早朝の執務室。

大机の上には、白銀の細工が施された細身の剣。束には七宝で白い花が描かれている。

「…?…これを、ナーガ様の母君が、ルウ様に?」

「何で? こんな立派な…」

シドとソラは戸惑いを隠せない。

「すまない…、母は、帯剣は十二歳からだという西風の掟を知らないので…」

「知っておられたぞ」

ルウはうっとりとした目でゆっくりに言った。

「だから、十二歳になるまで腰に下げるのは我慢しなさいって。とにかく、この剣が私を選んでくれたと」

「え、選んだ?」

「ああ。それから、両方の里と草原と砂漠の地の為に、この剣を振るえる強き者と成れますよ?…って、額に手を当てて、お祈りしてくれた」

「……………」

どうやら、気紛れで軽く与えたんでもないみたいだ…と、皆が思い始めた所に、遅れてやって来たノスリのリアクションが、とどめを差した。

「そ・その剣! どこから出て来たっ?!」

剣が、蒼の狼自らが、トルイと共に戦場を駆けていた時代に帯びていた物だと聞いて、皆、さっきまでの戸惑いがぶっ飛んだ。蒼の狼が、本気でこの娘の後ろ盾に着くって?!

「もういいか? 修練所へ行かなきゃ」

ルウは大人達の大騒ぎに困惑していた。

「あ…、ああ…」

「剣が気になるなら、預けとく。でもちゃんと返してな」

去りかける娘の左足首を、目敏くソラが見止めた。

「ちょ、ちょっと…、ルウ様、それは?」

ルウの足首には、昨日までなかったアंकレットが巻かれていた。白濁した緑の石を、細い銀の輪で連ねた細工物。

「えー? 急ぐのに。頂いたんだ、これも誕生日プレゼントー!」

「蒼の狼殿?」

「いや、こっちは、お師さん」

「お…?」

「お・し・さん。名前は知らない。私の守護石だって。ああ、遅刻しちゃう。じゃあな！」

ルウはシンリイを引っ張って駆けて行った。

残った大人達……啞然と机の剣を見つめる。

「そんな…、そんな大層な剣を…、西風の里に…」

ソラが困惑して、ナーガを見る。

「あのヒトが閃いた事だから…」

ナーガは長の直系の翡翠の剣を継いでいるし、ユーフィはカワセミの修行時代の細剣を気に入っていた。この剣はここが行き先だったのかも知れない。

「要するにさー！」

ノスリがどっかりと長椅子に腰を降ろした。

「側にいる者には近過ぎて見えないモノが、狼殿には見えているんだろ？ いいじゃないか。ルウは、俺達が思う以上に大物になれる素質ありってこったー！」

相変わらずノスリの言う事は、単純明快で気持ちいい。

皆で話して、剣はルウに渡す事にした。今のルウなら、無闇にひけらかしたりせず、里へ戻っても、十二歳になるまで、大切にしまっておくだろう。

本当に、子供の成長って早い……。

「随分、思い切りましたねえ！」

雪を払いながら戻って来た妹に、大長は熱いお茶を勧めた。

「だって剣が選んだんですもの」

蒼の狼はお茶に口を付けながらシレッと答えた。

あの娘は、特別、英雄になる訳でも豪傑になる訳でもないだろう。ただ妹は、自分なりのやり方で、子供達を励まして応援したいだけなんだ…。大長は目を細めた。

暖炉の前では、ここ何日かで力を使い果たしたカワセミが、敷物みたいに伸びている。

「まったく皆、ここを溜まり場みたいにな…」

と言いつつも、狼は毛皮を掛けてやっている。この神殿も変わり、妹も何だか変わった。

子供達は成長し、里も未来に向けて変わって行くんだらう。

山を覆う雪雲は、里へも伸びて同じ雪を降らせる。

くおしまい



